

都市と漁村の交流学習 in 高知 ～かつおのたたき体験～

高知県漁協女性部連合協議会
副会長 五島 真知子

1. 地域の概要

私たちの住んでいる高知県は四国の太平洋側に位置し、人口約 81 万人、総面積は 7,105k m² で 83% が山林です。

室戸、足摺の東西の岬には亜熱帯植物が自生しており、海岸線の全長は 713km に及び土佐沖には黒潮が流れている。

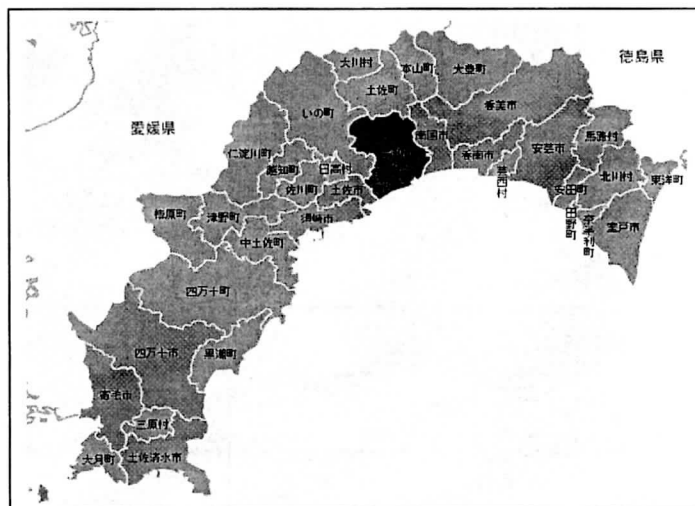


図 1 高知県

2. 漁業の概要

高知県は、太平洋に面し、地形が入りこんでいることから多くの漁港があります。また、黒潮が土佐湾沖を流れ豊かな恵みをもたらしており、古くから漁業のさかんなところである。本県の漁業は、伝統の遠洋・近海かつお、まぐろ漁業をはじめ、釣・はえ縄、定置網、魚類養殖などの沿岸・沖合漁業、ぶり類やマダイ等を対象とした魚類養殖、うなぎ養殖やあゆ漁などの内水面漁業が営まれています。

3. 研究・グループの組織と運営

高知県漁協女性部連合協議会は、貯金運動が主体となって発展し、昭和 31 年に結成されました。平成 20 年 8 月現在、22 漁協女性部・部員数 1,515 名で 5 ブロックより選任された 13 名の役員で構成されています。県下漁協女性部活動の活性化を促進し、漁村女性の地位の向上並びに漁村経済の改善と発展に資することを目的とし、魚離れが進む中、料理講習会などを開催し、調理方法を伝えると共に、子供たちと交流することで、いきいきとした漁村づくりにつなげたいと考えています。

4. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

私たち高知県漁協女性部連合協議会は、これまで各地元漁協女性部の活動以外に、県下女性部が一体となり、料理教室・イベント販売等を行っている。「都市と漁村の交流学習 in 高知」は小学生を対象に高知県の漁業やカツオの生態、海と山のつながりを学習すると共に、郷土料理としても有名なかつおのタタキづくりを実際に自分たちで体験してもらおうと企画したものです。高知県のかつお漁は一本釣りです。かつおを一尾ごとに高々と釣り

上げる豪快な漁法で、資源を取り過ぎない漁法でもあります。3月から11月にかけて、約10ヶ月間回遊するかつおの群れを追いながら漁を続けます。

かつおは土佐を代表する魚として、県民に親しまれており「県の魚」として指定されています。かつおはお刺身、たたきとして食卓に並ぶメニューとして、高知市の1世帯あたりの消費率は日本一ですが、高知市の子供たちは、漁業と接する機会が乏しく、カツオに触れる、新鮮な魚を食べることが少ないのが現状です。子供たちが漁業のことや魚のことを少しでも考えるきっかけにしていってほしいと思っています。

また近年の魚価安により、漁家経営は厳しい状況に直面しています。少しでも漁師である夫や息子の釣ってくる魚の良さをアピール出来たらとの思いからこの事業に積極的に取り組むこととしました。



5. 研究・実践活動の状況及び成果

都市と漁村の交流学习は、高知県漁港漁場課と当協議会が高知市内の小学校を対象に平成15年から平成20年までの間に23校実施してまいりました。開催当時は、開催場所に苦慮しておりましたが、年々開催要請が増え、体験者数も、平成15年度の95名から平成20年度は441名と順調に伸びており、この6年間で2,200人となりました。私たちは、高知県の代表的な魚であるカツオ漁業に理解を深めてもらおうと高知県漁協女性部連合協議会の役員が中心となり、小学校の授業へ講師として出向いています。役員だけでなく、各漁協女性部員にも参加を促し、県下全域の女性部で協力し、一体となって取り組んでいます。子供たちには、少しでも鮮度の良い魚を食べてもらいたく水揚げ港である佐賀漁港に揚がった新鮮なカツオを買取り、当日佐賀の女性部が車に魚を積んで運んでいます。

高知県は東西に広いため、車で片道2～3時間かけて県の中央に位置する高知市内の小学校に着きます。到着後、すぐ準備に取り掛かります。県内の漁業が多様であるため女性部の中にもカツオを捌いたことがない部員もたくさんいますのでカツオ漁業の町である佐賀の女性部員に捌き方、特徴、食べ方等を学び、小学生に興味をもってもらおうと思考錯誤しながら活動に取り組んでいます。

子供たちは、高知県水産試験場の担当者からカツオの生態について学び、その後女性部により、カツオの捌き方、特徴を学びます。子供たちは家庭で大きいカツオを見ることがないのでとても興味深く私たちの捌く姿を注目しています。生徒は各班10名に分かれ、また保護者も多数見学、参加しますので普段魚を捌くことに慣れている私たちも緊張し、

包丁を握ります。頭を落とし、腹を割り、子供たちの中には、「気持ち悪い」「触りたくない」と言った声も聞かれますがとても興味を持ってくれますので、漁師である夫や息子の釣っている魚の良さやおもしろさをアピールすることができ、魚を通じて子供たちに接する機会の大切さを感じているところである。子供たちは、慣れない手つきで悪戦苦闘しながらも身を切り落とすたびに「すごい」「やったー」と歓声を上げ興味津々。またカツオの消費が多い高知市の主婦も普段は量販店などでパック詰めされたかつおのたたきを購入しているため、魚の捌き方を知らないということであらためて気づかされた。無事に捌き終わると教室から外に出て薫焼きをします。薫焼きは高知県漁港漁場課の担当職員等の協力を得て行い、皿鉢に盛り付け出来上がりです。子供たちと一緒に給食を食べ、かつおを捌いているときには「魚くさいから嫌い」と言っていた子も、代わる代わる包丁を振ったタタキに愛着が湧いたのか「おいしい」「いままで食べた中で一番おいしい」といった笑顔を見ると、もっとこういう活動を増やしたい、また保護者の方にも、地元の魚の良さを知ってもらいたいと意欲がわきました。

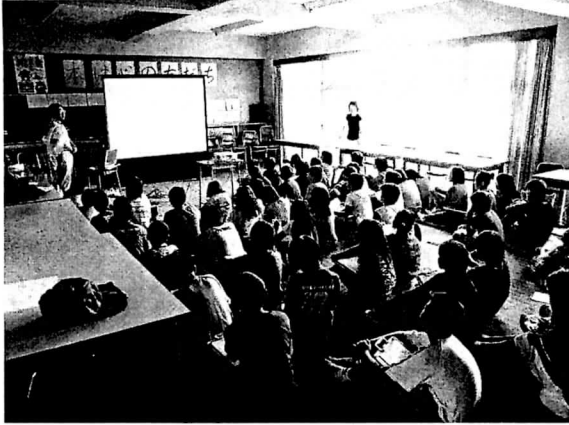


6. 波及効果

交流学习することにより、新聞・テレビ・ラジオ等で広報され、高知県漁協女性部連合協議会の活動が一般の方にもアピールする機会が増え、魚食普及活動にも大きく貢献している。子供たちの魚離れが言われているが、「本当においしい魚を提供すれば子供たちは喜んで食べる」ということを実際に感じる事が出来たと同時に、保護者の方にも、地元の魚のおいしさを伝えることができ、魚食をPRすれば消費拡大につながると実感できた。私たち参加女性部も、この活動を通じ、子供たちの喜ぶ顔やいただいた感謝の手紙を見て、あらためて食育と魚食の大切さを伝え続けたいと考えている。また、去る平成20年12月8日首相官邸において開催された有識者会議で平成20年度「立ち上がる農山漁村」として選定されました。

7. 今後の課題や計画と問題点

各漁協女性部活動が減りつつある中、今後も、都市と漁村の交流学习、料理教室を継続して、活動の楽しさや他地区女性部とのつながりを大切に漁村の活性化に努めたい。また、地元の魚のおいしさを知らない子供たちがたくさんいることに気づかされ、「地産地消」や「食育」といったブームの中、私たち女性部の役割はとても大切だと感じました。私たちの活動をこれからも若い世代の女性部に積極的に取り組んでもらい、地域の魚食文化を伝えていきたい。



1. 生態学習の授業



2. カツオをさばく



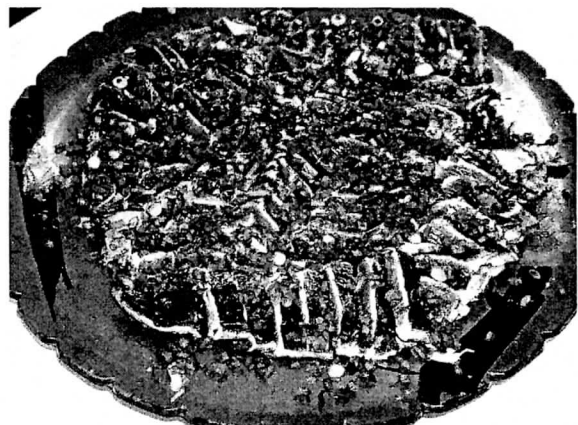
3. カツオを藁で焼く



4. かつおを皿鉢に盛る



5. 給食の様子



6. カツオの藁焼きたたき

わら焼きたたき挑戦

伊野小 都市と漁村の交流学習



カツオのわら焼きたたきに挑戦した児童ら（いの町八田の伊野南小）

【土佐】子どもたちが魚や漁業に親しむきっかけにと、吾川郡いの町八田の伊野南小学校で四日、「都市と漁村の交流学習」が行われ、五年生八十五人がカツオのわら焼きたたきに挑戦した。県や県漁協女性部連合協議会の主催で、幡多郡黒潮町の佐賀漁港に揚がったカツオ十三匹を用意した。児童はたっぷり脂が乗ったカツオを見て、「おお、でっかい」と大喜び。同協議会の浜中数子会長は「子どもらにカツオや魚を好きにならなうたい。こうした取り組みを通して、大人になっても思い出せる古里の味を知ってほしい」と話していた。

（宮崎順一）

高知新聞朝刊 2007.7.5 掲載

わら焼きたたき挑戦

高知市の一ツ橋小5年生



カツオをわら焼きする子どもたち（高知市の一ツ橋小学校）

土佐の郷土料理を学ぶで行われ、五年生がカツオのわら焼きたたきに挑戦した。同協議会の主催。新しいからさき方を教わ

高知新聞朝刊 2007.9.22 掲載

り、慣れない手つきでカツオを切り分けた。わら焼きでは「熱くて近寄れない」と及ぶ腰になりながらも懸命にあぶり、出来上がったたたきを「えっ、すくおいしい」「苦くない」とほお張っていた。同協議会の明神多紀子さんは「魚嫌いの子どもたちが多くと聞けが、今回の体験を通じて魚に興味を持ってもらえれば」と話していた。同協議会では十月にも横浜新町、横内、旭の三小学校で交流学習を行う予定。



おせわにな
たかたへ

かつおを焼くときな
どかつおのことで
せつめいしてくれてあ
りがとうございま
した。おかげでいろ
いろなことをまね
ることができました。
ほんとうにありがとう
ございました。

5年 枝川学校
川添ひかる

